

未来への鍵 「新しい近接性」

新型コロナウイルスの流行を、歴史の流れから読み解くと新たな未来が見えてくる――。岡山大が14日に開いたシンポジウム「パンデミックと文明」では、感染症、歴史、社会学の専門家4人が話し合った。未来へのキーワードとして浮かんだのは「新しい近接性」だった。

(中村通子)

感染流行 歴史から読み解く 岡大シンポ

長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(国際保健学)が基調講演で言及した。「新しい近接性」とは、山本教授によると、「一気に進んだ孤食やテレワークな



パネルディスカッションの様子

社会的距離取りつつ共感を育成

どで失われた「近しさ」をこれまでとは違う形で確立すること。社会的距離を取りつつ、人とつながる「近しさ」と「共感性育成」のあるべき姿を探るべきだという。その上で「特定の集団内だけの共感性を高めることは、他集団の排除や差別につながる。自分と違う人たちとどう共感を育んでいくかを考える必要がある」と強調した。

岡山大「文明動態学研究所」の松本直子所長(考古学)はこの考えの重要性に賛同。「他人と食べ物を分け合うのが人間の特性。『共食』が共感を育み、社会を形成する鍵となってきた」と話した。そして「ハンセン病患者に対する隔離政策などの経験から、私たちは誰もが人間らしく生きる権利があるとの認識にたどり着いた。ここをコロナを巡る差別が脅かしている」と指摘した。

岡山大の今津勝紀教授(日本古代史)は古代日本の疫病対策について報告した。古代日本では約10万人が数千里四方に住む都市が形成され、そこに地方から租税を運ぶ活発な人の往来があったと説明。同時に、疫病の流行が始まり「人口集中と交通が、疫病の流行を生んだ」と紹介した。

松岡弘之講師(日本近現代史)は国立ハンセン病療養所の自治会活動について報告。「社会システムの防衛のため、患者らの人権が侵害された」と指摘した。

対策 「戦い」ではなく「共生」中心に

山本教授の基調講演の要旨は次の通り。

近代微生物学は「病気を起こす病原体を見つけ、それをなくすことで治療する」という姿勢で進んできた。しかし、ヒトの体内には約100兆個も微生物が常在して巨大なネットワークを確立し、ヒトの健康や環境適応に何らかの役割を演じている可能性があること

が分かってきた。微生物は「倒すべき敵」なのか、という疑問がわき起る。

世界の多くの指導者やマスメディアは「ウイルスとの戦争」に例えた。だが私は違和感を覚える。

何かを倒すのではなく、私たちの守るべきもの、例えば命であり、生活を「守る」ことに注視すべきだろう。21世紀の感染症対策は「戦い」ではなく「共生」を中心にした構築が必要だ。

麻疹など急性感染症の流行には、一定規模の人口が必要だといわれてきた。一定規模の人口が必要だといわれてきた。一定規模の人口が必要だといわれてきた。一定規模の人口が必要だといわれてきた。

中世欧州のペスト禍では甚大な人的被害のため、労働者の賃金が上昇して荘園の崩壊につながり、人材登用も進んだことでルネサンスが開花した。

コロナ禍では、社会のIT化が一気に進んだ。パンデミックがなければ、10年は遅れていただろう。だが、ITは手段であって目的ではない。ITを使ってどんな社会を作るのか。

学校の授業や職場の会議、会食など、共感を育む場がオンライン化される今、「新たな近接性」の確立が必要だ。「集中と分散」が鍵になるだろう。各人が自宅でも日中テレワークをするのではなく、「分散の拠点」をうまく作る、というイメージだ。



長崎大 山本太郎教授